

# 表具師

内田幸三

住まいの形を整えるふすまや障子、文化を支えてきた掛け軸や屏風。日本人の暮らしに寄り添う表具を手掛けてこの道ひとすじに。



使用する糊の量や濃さは表具の材質によって様々。「糊付けが仕事の要」と話す

## 多彩な引出しで、憩いの空間を演出する

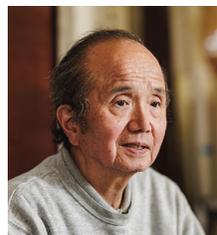
上/表装に使う裂地。正絹や金襴など各種を揃える 下/使い込まれた道具の数々。自らがこの道に進んだ当時の物や、先輩から受け継いだ物など、優に半世紀以上は超えている



## いくつもの工程を経て 空間や作品を引き立てる

掛け軸、額、屏風、ふすま、障子などの表装や建具を手掛ける職人を「**経師**」あるいは「**表具師**」という。表具の技術は大陸から仏教の伝来と共に伝わり、京都で発展。江戸時代になると、町の拡大に伴い人々の暮らしに欠かせない仕事として広まり、八丁堀や日本橋界隈の職人町には多くの表具師が住んだ。周辺には現在もその技術を継承する表具店が点在しており、その一つが「**内田表具店**」だ。

人形町駅からほど近い街角に、小さなお稲荷さんが佇む。江戸時代、大名屋敷の邸内社として創建された笠間稲荷神社東京別社だ。明治三五年（一九〇二）頃、内田表具店の



「一番難しいのは障子かな。家庭でも障子張りするでしょう。だからこそ、プロによる仕上がりが評価される物なんです」

初代夫婦は神田で表具店を開いたが、この稲荷社に足繁く参拝した縁から、明治四二年（一九〇九）頃には稲荷社に隣接する現在の地へと移った。現在の店主は内田幸三さん。子どもの頃は住み込みの職人が多い時で七人いて、作業場の傍らで糊付けなどを手伝っていた。大学に進学するも、学園紛争でストライキが続き、授業もなかったため、十九歳で中退して家業を継ぐ道を選ぶ。「昭和の頃はこのあたりは料亭が四〇軒くらいありましたよ。芸者さんもたくさん歩いていました。料亭

にふすまや障子を入れたり張り替えたりする仕事がたくさんあって、忙しかったですね」と振り返る。この日、作業をしていたのは神田祭の際に町会の神酒所に掛ける軸の修理。トントン、トントン——糊を付けた部分を金槌でリズムカールに叩く音が、静かな作業場に響く。掛け軸の制作・修理には裏打ちだけでなく「肌裏」（薄手の和紙を使用）、「増し裏」（二度目の裏打ち）、「中裏」（さらに補強する場合）、「総裏」（本紙と継ぎ足した裂地を一体化する）と工程を重ね、その合間にも布や紙の裁断、糊付け、乾燥などの作業が続く。軸に仕立てる書画の多くは、依頼者から預かったかけがえのない一点物。だからこそ、失敗は許されない。軸の周囲を彩る裂地の選定は、内田さんに一任されることが

多い。主役はあくまで書や絵。それを引き立てるための軸装の意匠や色の組み合わせには、内田さんの頭の中に無数の引き出しがある。住み込みの職人たちが忙しく働いていた作業場には現在、内田さん一人。「新築の家で、ふすまや障子を入れるところは少なくなりましてね。でも、旅先の旅館で和室にふすまや障子があると、何だかホッとしませんか。この心地よさを伝えていきたいんです」と語る。「後継ぎは？」と尋ねると、「息子が二〇代後半で会社勤めをやめて、この仕事をやりたいと。よそで修業させてもらって、今は墨田区で店を構えていますよ。まだ見に行ったことないんだけど」と笑う。突き放すようでいて、どこか照れと嬉しさの入り混じった声だった。

定は、内田さんに一任されることが

うちだ こうぞう ●

1950年生まれ。内田表具店3代目。2002年、東京都伝統工芸士に認定。2025年、一般社団法人伝統的工芸品産業振興協会の伝統工芸士に認定。

東京都中央区日本橋浜町 2-11-4